スポニチ 北海道
（第3種郵便物認可）　2020年（令和2年）3月31日（火曜日）

昨秋の支部予選敗退後、丸刈り廃止など大改革

札幌第一

自主性重視で再出発

菊池監督（手前）の話を聞く札幌第一ナイン

コロナ禍の春 立ち上がる高校球児

練習再開

春夏合わせて6度の甲子園出場を誇る札幌第一が30日、練習を再開した。札幌支部予選で敗退した昨秋の大会後に丸刈り廃止を含めたチーム改革を敢行。自主性を重視して、12年以来8年ぶりとなる夏の甲子園を目指す。

トスバッティング（上）、キャッチボール（下）、手押し車（左）で汗を流す

マネジャー不在「部門制」で運営

先月16日以来1カ月半ぶりとなる練習は、冬の間は倉庫に眠っていたケージなどの用具をグラウンドに出すことから始まった。ウオーミングアップ、キャッチボール、トス打撃と続き、合計3時間。青空の下で汗を流した山田翔太主将（2年）は「やるぞ！という気持ち。早く体力を戻して、連係プレーをしたい」とはやる気持ちを隠さなかった。

昨春のセンバツ出場メンバー6人が残るチームは、昨秋の支部予選で札幌国際情報に敗れた後、大改革を敢行した。丸刈りを廃止して短髪OKに。さらに部門制を採用した。

グラウンド上では山田主将と高木和真副将（2年）が仕切り、グラウンド外の管理・立案の仕事を久米龍成統括（2年）と水上裕介副統括（2年）が選手兼任で担う。2年生23人全員が、総務部、庶務部、選手管理部などの部門に所属して、チーム運営に携わる。

練習の段取りを確認する札幌第一の山田主将（右）と久米統括

山田主将「もう一度甲子園行きたい」

自ら考えて行動する自主性と主体性を養うことが狙いだ。「生徒主体のチームをつくり、結果に結びつけたい。髪形は一つの象徴」と菊池雄人監督（47）。監督就任20年目で初めてのマネジャー不在という事態をプラスに転じる策でもある。

冬場の練習は、体力測定の数値もアップし、順調だった。新型コロナウイルス感染拡大で1カ月半活動できなかったが、タブレット端末を通じて選手から届いた活動報告を目にした指揮官は、自主性の芽生えを感じている。「このブランクがあったことで僕自身も新鮮な気持ち」と改革を加速させる。

夏の予選まで3カ月を切った。山田主将は、昨春のセンバツ初戦で山梨学院に大敗した悔しさを忘れていない。「もう一度、甲子園に行きたい。みんなで話し合って、組織でやっていけるチームにしたい」とリベンジの舞台をつかみ取る。

（石川　加奈子）